論　文
ライフデザイン学研究 17
p.51-82（2021）

聖母マリアのカンティーガ（4）
― ひとりの王の苦悩の生涯 ―

Las cantigas de Santa María, IV,
Una vida dolorosa del rey

菊　地　章　太*
KIKUCHI Noritaka

要旨

カスティーリャ・レオン王国の王アルフォンソ10世は、カンティーガと呼ばれる詩歌を集成した。聖母マリアを讃えたその書物は『聖母マリア讃歌集』の名で呼ばれ、420篇におよぶ作品を収めている。抒情詩の表現にふさわしい文学言語として重んじられたガリシア＝ポルトガル語で全篇がつづられ、カンティーガのひとつひとつに曲が附されて楽譜が中世の記譜法で記してある。それぞれの場面を表した多数の挿画が写本をかざっており、いずれも13世紀イベリアの信仰と芸術を伝える貴重な遺産となっている。アルフォンソ王の宮廷にはキリスト教徒とともにイスラーム教徒やユダヤ人の詩人・音楽家が活動していた。学芸への愛好にあふれた環境のなかで、アラビア語の抒情詩やイスラーム音楽を取り入れつつ聖母のカンティーガが語り出されたのである。

本稿は『聖母マリア讃歌集』のなかから次の５つの主題を考察の対象とし、それにふさわしいカンティーガをいくつか選んで読み解いていくこころみである。第１章では聖母のカンティーガがめざしたものを明らかにし、詩の韻律形式とその抒情性の源泉を探っていく。第２章では聖母の奇跡を語るカンティーガを取りあげ、同じ主題をあつかったヨーロッパとほかの地域の文芸作品との比較をおこなう。第３章では聖母マリアの聖地にちなむカンティーガを取りあげ、当時の巡礼のありようを写本挿画の描写もまじえてたどる（以上前号）。第４章ではアルフォンソ10世の生涯を語るカンティーガをもとに、学芸への情熱を抱きつづけた王の挫折に満ちた歩みを詩句のなかに探る（以上本号）。第５章では聖母の祝祭のカンティーガをカトリック神学の視点から捉え、のちのスペイン・ポルトガルでさかんに信仰された聖母の無原罪御宿りの源泉を読み取っていく。以上の考察をもとに、聖母のカンティーガに現れた13世紀イベリアの信仰と芸術の諸相を明らかにすることをめざしたい。

キーワード：聖母マリア信仰　カンティーガ　ガリシア＝ポルトガル語　中世イベリア芸術　カトリック神学

*東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科　Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒115-8650　東京北区赤羽台1-7-11

第４章　王の生涯のカンティーガ

１．葛藤と闘病の後半生

ここまでアルフォンソ10世がみずから編纂にたずさわった『聖母マリア讃歌集』について、そこに収録された奇跡と聖地巡礼にかかわるカンティーガのいくつかを取りあげてきた。前章の最後に王の身に起きた奇跡に言及し、サンタ・マリア・デル・プエルト Santa María del Puerto すなわち「港の聖マリア」と呼ばれたその場所が巡礼の聖地に変貌していくことにふれた。本章でその次第を語ったカンティーガを読むに先立ち、ここであらためてアルフォンソ10世のこの時期の動向をふりかえってみたい。

さかのぼってカスティーリャの王アルフォンソ８世は1212年にラス・ナバス・デ・トローサの戦いに勝利した。イスラーム勢力とキリスト教諸国の形勢を決定的に逆転させたこの戦い以後、アル・アンダルスのイスラーム政権は分裂をくりかえした。この機会をのがさず、孫のフェルナンド３世、すなわちアルフォンソ10世の父王はカスティーリャとレオンを統合したのち、レコンキスタを推進させる。1236年に古都コルドバを占拠し、48年にはセビーリャの攻略に成功した。

フェルナンド３世はさらに攻勢を強め、アフリカ遠征の計画をめぐらしたが、はからずも病に冒されてセビーリャで没する。1252年のことだった。代わって即位したアルフォンソ10世は父王の意志を受け継ぎ、サンタ・マリア・デル・プエルトに艦隊を集結させてモロッコの港湾都市サレに侵攻した。これは1260年のことで、カンティーガ328番に語られていた。ついでアル・アンダルス諸都市の奪回に着手し、1262年にニエブラを攻略、翌々年以降にヘレスを服属させた。それに前後して地中海に臨むムルシア王国を併合している。いずれも本稿第１章で読んだ『讃歌集』の序詩「カスティーリャの王」が語るところである。

このころがアルフォンソ王にとって絶頂の時期であったかもしれない。グラナダのイスラーム王朝を除き、広大なアンダルシア大平原からポルトガル西南端のアルガルヴェまで支配を拡げた。セビーリャに宮廷を置いて、学者たちとさまざまな書物の編纂をくわだて、詩人たちと作詩にいそしんだ。だがこうした平穏な時間は長くはつづかなかった。やがてアル・アンダルスでは反乱が頻発し、そのうえ親族の離反が王の心を傷めた。これに追い打ちをかけるように王自身の病がたびかさなったのである。

アルフォンソ王の後半生は肉親との葛藤と闘病にあけくれた。前者については追々ふれていくとして、後者についてはその遠因とされるものが指摘されている。王の妻ビオランテ Violanteの父であるアラゴン王ジャウマ Jaume１世の『事績録』*Lilbre dels Feyts* に記載がある。1269年に義父のもとを訪れてクリスマスを過ごしたのち、カスティーリャに帰還する途上のことだった。アルフォンソ王は「ブルゴスで馬から受けた一撃で床につくほどの重い病となった」«ell era fort malalte de la cama de un colp que un cavall li havia dat en Burgos» とある[(1)]。ブルゴスはイベリア北東のアラゴンとカスティーリャを結ぶ交通の要所で、王はここで６月まで療養することになる。顔の傷が悪化して癌腫の原因となり、その転移が1284年の王の死までつづくことになったという[(2)]。ただし、それ以前にも王の病のことはカンティーガにいくつも語られている。あるいは体質から来るものだったのではないか。

2.「こらえがたいこの病」

カンティーガ367番はサンタ・マリア・デル・プエルトで王の身に起きた奇跡の治癒を語る。アルフォンソ王自身が聖母マリアに救いを求め、みずから建立した港の教会へ向かった。以下にテクストと試訳を示したい[3]。

［題辞］

1 ［C］omo santa Maria do Porto guareçeu a［l］ rey Don
2 Affonso dũa grand' enfermedade de que lle ynchavan
3 as pernas tan muito que lle non podiam caber enas calças.

どのように港の聖マリアがドン・アルフォンソ王の
重い病を癒やしたのか。その病は脚を腫れあがらせ、
ズボンを履くことができないほどの重症であった。

［反復句］

4	*Grandes miragres faz santa Maria*	聖マリアは彼女を信じる者に
5	*e fremosos a quem s' en ela fia.*	大いなる麗しい奇跡をおこなう。

［第1詩節］

6	Ca en aquele que s' a ela chama	聖マリアに祈り、彼女に仕え、
7	e a serv' e a loa e a ama,	彼女を讃え、慕う者が
8	macar jaça en leito ou en cama	たとえ寝床や寝台にひどく苦しんで
9	con gran door, sãa-o todavia.	臥していても、彼女は癒やしてくださる。
10	*Grandes miragres faz santa Maria...*	聖マリアは彼女を信じる者に……

［第2詩節］

11	Dest' un miragre quero que sabiades	これについて、聖マリアがおこなった
12	que fez mui grande na que esperades	大いなる奇跡をあなたがたに知らせたい。
13	todos merçee e u a achades	夜も昼もどんな時にも恵みを望み、
14	en todo tempo, de noit' e de dia.	それを見いだす人に知らせたい。
15	*Grandes miragres faz santa Maria...*	聖マリアは彼女を信じる者に……

［第3詩節］

16	Aquest' avẽo al rey de Castela	それはカスティーリャおよびサンティアゴ・
17	e de Santiago de Compostela	デ・コンポステラの王に起きたこと。
18	quand' ya veer a ygreja bela	王がアンダルシアに建てた美しい教会を
19	que el fezera na Andaluzia,	見に訪れたときのことだった。
20	*Grandes miragres faz santa Maria...*	聖マリアは彼女を信じる者に……

［第4詩節］

21	Que en mui pouco tenpo acabada	それは［天上で］戴冠したマリアを讃えて
22	foi a onrra da Virgen corõada,	わずかな期間で完成した教会で起きた。
23	e de torres e de muro cercada.	それはこの場所にとって欠かせない

24　segund' aquel logar mester avia.	塔と壁で囲まれた建物だった。
25　*Grandes miragres faz santa Maria…*	聖マリアは彼女を信じる者に……
［第 5 詩節］	
26　Aquel rei for a enferm' en Sevilla	その王はセビーリャでひどく重い病を
27　de grand' enfermidade a maravilla,	患っていた。それは［のちに］
28　de que guariu por aquela que trilla	たくらみに満ちた悪魔を踏みつけた
29　mui mal o demo chẽo de perfia.	彼女の力で癒やされたのである。
30　*Grandes miragres faz santa Maria…*	聖マリアは彼女を信じる者に……
［第 6 詩節］	
31　E pois［guariu］desta enfermidade,	この病が癒えたのち、それから
32　el rey ouv' enton mui gran voontade	王はそのようなことが起きた
33　d' ir a logar u tan gran santidade	いとも聖なる場所に行くことを
34　á com' ali；e el en romaria	切望し、巡礼におもむいた。
35　*Grandes miragres faz santa Maria…*	聖マリアは彼女を信じる者に……
［第 7 詩節］	
36　Foi alá logo per mar e per terra.	たとえそこが海路や陸路によるところであれ
37　E macar l[l]' o tenpo fez mui gran guerra,	また悪天候に悩まされることがあっても
38　guió-o ben aquela que non erra	高ぶることなく自分に仕える者を
39　a quena serve ben sen oufania.	［マリアは］あやまたず大事にみちびくであろう。
40　*Grandes miragres faz santa Maria…*	聖マリアは彼女を信じる者に……
［第 8 詩節］	
41　E ind' el rei per mar, tanto ll' incharon	王が海路を進むうち、両脚はひどく腫れ、
42　as pernas ambas e se lle pararon	［炎症で］赤くなるまでになったので、
43　assi vermellas que todos cuidaron	この病から容易には癒えないだろうと
44　que daquel mal mui tarde sãaria.	誰もが思うほどだった。
45　*Grandes miragres faz santa Maria…*	聖マリアは彼女を信じる者に……
［第 9 詩節］	
46　Ca ja de tal guisa inchad' aviam	もはや靴が履けなくなるくらい
47　que enas osas caber non podiam ;	両脚は腫れあがってしまい、
48　demais os coiros delas se fendian	ついには皮膚が裂け、そこから
49　e agua amarela en saya.	黄ばんだ体液が流れ出てきた。
50　*Grandes miragres faz santa Maria…*	聖マリアは彼女を信じる者に……
［第10詩節］	
51　Mais el rei, que toda sa esperança	それでも王は疑うことなく
52　avia ena Virgen sen dultança,	処女マリアに希望のすべてを抱いて、
53　non quis por esto fazer demorança,	そのためにとまどうことなく、
54　mais foi-ss' ao Porto quant' yr podia.	あたう限り［聖マリアの］港に急いだ。

55 *Grandes miragres faz santa Maria...* 聖マリアは彼女を信じる者に……

［第11詩節］

56 E chegou vernes aa ssa ygreja 王は金曜日にこの処女［マリア］の教会に

57 daquesta Virgen que bẽetya seja, 到着し、その祝福があるようにと、

58 e con esta enfermidade sobeja こらえがたいこの病を抱きながら、

59 foi ant' o seu altar tẽer vegia. 徹夜で祈るためその祭壇の前に進んだ。

60 *Grandes miragres faz santa Maria...* 聖マリアは彼女を信じる者に……

［第12詩節］

61 E quando os madudin[n]os começaron 教会の司祭たちが朝の祈りをはじめ、

62 os seus clerigos, que os ben cantaron, おごそかに［祈りの言葉を］唱えると、

63 log' amba-las pernas lle desincharon そのとき、王の両脚の腫れが引き、

64 e guareceu daquela maloutia. この病から癒やされたのである。

65 *Grandes miragres faz santa Maria...* 聖マリアは彼女を信じる者に……

［第13詩節］

66 E el rei log' e toda companna, 王と臣下の誰もがこの大いなる奇跡を

67 que viron a maravilla tamanna, 目にするや、神からの救いを

68 loaron muit[o] a que nos gaanna 私たちにもたらしてくださり、よろこびを

69 de Deus saud' e nos dá alegria. あたえてくださる御方を大いに讃えた。

70 *Grandes miragres faz santa Maria...* 聖マリアは彼女を信じる者に……

題辞に「ズボン」«calças» を履くことができないとあり、47行目に「靴」«osas» が履けないとある。皮膚が裂けて体液が流れ出すという痛々しさだった。「こらえがたいこの病」«esta enfermidade sobeja» と58行目にあるが、いったい何の病だったのか。

王が巡礼におもむいた教会は「塔と壁で囲まれた」«e de torres e de muro cercada» 建物だと23行目にある。前章で述べたとおり、現在サン・マルコス城と呼ばれる遺構は4基の塔と分厚い壁を備えており、地中海沿岸に見られる要塞教会の典型である。建立はサンタ・マリア・デル・プエルトがカスティーリャ・レオン王国に編入された1260年以後のことだから、このカンティーガもしたがってそれにいくらか遅れる時期の作となろう。

28～29行目に「たくらみに満ちた悪魔を踏みつけた彼女の力で癒やされた」«de que guariu por aquela que trilla mui mal o demo chẽo de perfia» とある。これはマリアが蛇を踏みつけている姿を想起させる。アダムとイヴをたぶらかして原罪をもたらした蛇がここに言う悪魔であり、それを踏む姿は無原罪の聖母の形象そのものである。本稿第5章（次号）でくわしくたどりたい。

56行目に「王は金曜日にこの処女［マリア］の教会に到着し」«E chegou vernes aa ssa ygreja daquesta Virgen» とある。翌日の土曜日は聖母に祈る日とされてきた。したがってその前夜に着くことをめざしたのだろう。土曜日にマリアに祈る習慣は、8世紀にシャルルマーニュの宮廷で典礼改革をおこなったアルクイン Alcuinus にはじまる。アルクインは各週日に行なう信心ミサの式文をまとめた際、土曜日に行なうべきものとしてマリアの信心ミサの式文を作成した(4)。これがやがて西ヨー

ロッパで普及していく。スペインでは特定の祝祭日のない土曜日を「マリアの汚れなき御心」el Inmaculado Corazón de María の日として現在も祝っている。その前夜、王は「徹夜で祈るためその祭壇の前に進んだ」«foi ant' o seu altar tẽer vegia» と59行目にある。«vegia» は教会ラテン語の vigilia にあたり、徹夜の祈りを意味する。

カンティーガ367番はエル・エスコリアル写本E（j.b.2）の第329葉表から裏を占めている。329葉の第１列から２列の途中まで楽譜が掲載され、つづいて329葉裏の第２列まで詩句が記される。挿画は掲載されていない。

これはアルフォンソ王自身の生涯にかかわるカンティーガのひとつで、王がわずらった痛ましい病を語っていた。ここでは王を三人称で呼ぶが、カンティーガのなかには一人称を用いたものがある。そこには満身創痍ともいうべき人間の苦しみが語られている。

３．医師の処方もおよばない

カンティーガ209番は題辞をのぞく本篇が王自身の作とされてきた貴重な作品である。王の肉声が聞こえてくるだろうか。以下にテクストと試訳を示したい[5]。

［題辞］

1　[C]omo el Rey Don Affonso de Castela adoeçeu en Bitoria
2　e ouv' hũa door tan grande, que coidaron que morresse ende,
3　e peseron-lle de suso o livro das Cantigas
4　de Santa Maria, e foi guarido.

どのようにカスティーリャのドン・アルフォンソ王がビトリアで病にかかり、
王が亡くなると誰もが思うほど激しい苦痛を抱いたが、
聖マリアのカンティーガの本を王のもとに置き、
そして癒やされたか。

［反復句］

5　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz,*
6　*a Deus quen lle nega o ben que lle faz.*

たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは、
神を否定し、神がもたらす恵みを否定する者。

［第１詩節］

7　Mas en este torto per ren non jarei
8　que non cont' o ben que del recebud' ei
9　per ssa Madre Virgen, a que sempr' amei,
10　e de a loar mais d' outra ren me praz.
11　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz...*

だが私は決してこのような過ちにおちいらない。
神からいただく恵みを語らずにはいないのだから。

恵みはいつも愛する母なる処女を通じてもたらされる。
よろこんで讃える者は彼女のほかにはいない。
　たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは……

［第 2 詩節］

12　E, como non devo aver gran sabor
13　en loar os feitos daquesta Sennor
14　que me val nas coitas e tolle door
15　e faz-m' outras mercees muitas assaz.
16　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz...*

どうしてこの貴婦人がなされることを讃えるのを
大きなよろこびとしないことなどあるものか。
彼女は私を悲しみのなかから救い、痛みを取り除き、
ほかにも多くの恩恵を私にもたらしてくださる。
　たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは……

［第 3 詩節］

17　Poren vos direi o que passou per mi,
18　jazend' en Bitoira［Bitoria］enfermo assi
19　que todos cuidavan que morress' ali
20　e non atendian de mi bon solaz.
21　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz...*

それだから私の身に起きたことをあなたがたに語ろう。
それはビトリアで病に伏せっていたとき、
人々はみな私がそこで死ぬだろうと思ったほどで、
回復するとは誰も期待しなかったのである。
　たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは……

［第 4 詩節］

22　Ca hũa door me fillou［y］atal
23　que eu ben cuidava que era mortal,
24　e braadava：«Santa Maria, val,
25　e por ta vertud' aqueste mal desfaz.»
26　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz...*

それほどの痛みが私を捕らえていたため、
私自身も死ぬだろうと強く思い、
泣き叫んだ。「聖マリア、お救いください。
あなたのお力でこの病を取り除いてください」
　たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは……

［第 5 詩節］

27　E os fisicos mandavan-me põer

28　panos caentes, mas nono quix fazer,

29　mas mandei o livro dela aduzer;

30　e poseron-mio, e logo jouv' en paz,

31　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz...*

医師たちは暖めた布を私にかけるよう命じたが、
しかし私はそうすることを望まずに、
彼女［マリア］の本を持ってくるよう命じ、
私のもとに置くと、すぐに心が穏やかになった。
　たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは……

［第 6 詩節］

32　Que non braadei nen senti nulla ren

33　da door, mas senti-me logo mui ben ;

34　e dei ende graças a ela poren,

35　ca tenno ben que de meu mal lle despraz.

36　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz...*

私は泣き叫ぶこともなく、なんらの痛みも
感じることなく、すぐに心地よくなった。
聖マリアが私の病を案じられたことを知って、
そのとき私は彼女に感謝をささげたのである。
　たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは……

［第 7 詩節］

37　Quand' esto foi, muitos eran no logar

38　que mostravan que avian gran pesar

39　de mia door e fillavan-s' a chorar,

40　estand' ante mi todos come en az.

41　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz...*

このことがあったとき、多くの者がその場におり、
私の苦痛に対してひどく同情を示し、
涙を流すありさまで、私の前にそろって
列をなすようにして並んでいたのである。
　たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは……

［第 8 詩節］

42　E pois viron a mercee que me fez

43　esta Virgen santa, Sennor de gran prez,

44　loárona muito todos dessa vez,

45　cada ũu põ_endo en terra sa faz.

46　*Muito faz grand' erro, e en torto jaz...*

そして彼らがこの聖なる処女、いとも尊い貴婦人が
私になされた恵みを目にすると、
誰もが彼女を心から讃え、みなそれぞれに
額を床につけ［礼拝し］たのである。
　たいへんな大罪を犯し、過ちにおちいるのは……

カンティーガの舞台であるビトリア «Bitoria»（現在の Vitoria）はバスク地方の中心都市で、この時代にはカスティーリャ・レオン王国に属していた。資料によって確証できる王のビトリア滞在は、1276年９月５日から翌77年３月３日までの６か月間である[6]。

題辞に「聖マリアのカンティーガの本」«o livro das Cantigas de Santa Maria» とある。29行目に「彼女の本を持ってくるよう命じ」«mandei o livro dela aduzer» たのも同じ書物である。これは『聖母マリア讃歌集』の最初の稿本である百篇のカンティーガの集成と考えられている[7]。現在のトレド写本Toの原本にあたる手稿本（もしくはその写し）であろう。王が心血をかたむけて編纂した聖母をたたえる書物の力は、どんな医師の処方もおよばないものだった。

亡くなるまでの長きにわたり『讃歌集』は王とともにありつづけた。1284年１月10日の日付を有する記録がある。逝去の数週間前に記された二度目の遺言であり、そこには「さらに聖マリアの奇跡と讃美の歌のすべての本を私たちの遺体が葬られるこの教会に納め、聖マリアと私たちの主の祝日にそれが歌われるよう命じる」«Otrosí mandamos que todos los libros de los cantares de los miraglos et de loor de sancta Maria sean todos en aquella eglesia ó el nuestro cuerpo fuere enterrado, e que los fagan cantar en las fiestas de santca Maria e de Nuestro Sennor» とある[8]。

カンティーガ209番はエル・エスコリアル写本Eとフィレンツェ写本Fに掲載されている。写本Eでは第193葉表を占め、第１列に楽譜が記され、第２列に詩句が記される。写本Fでは第119葉表から裏を占めている。119葉表の第１列に譜線を記してあるが音符は記していない。つづいて第２列の末尾まで詩句が記される。119葉裏に挿画が配され、写本の１葉全部を使って６つの場面が展開する［図１］。これまでと同じように、１段目の向かって左を第１場面とし、３段目の右の第６場面へ進んでいく[9]。

第１場面には寝台に横たわる王が描かれている。苦痛の表情があらわである。向かって左に孔雀の羽の団扇をかざす従者、右に王の症状に困惑しながら語りあう人の姿がある。上段の文字は「どのように王ドン・アルフォンソは誰もが［王は］亡くなると思うほどの苦痛を抱いたか」«cómo al rei don Afonso fillou un door atal que todos cuidaron que morresse» とある。

第２場面以下も同じ情景で、帽子をかぶった人物が王に布をさしだすさまが描かれている。カンティーガに語られたとおり、医師が暖めた布を勧めているのだろう。王はこれを拒む仕草である。右端には顔を覆って泣いている人の姿がある。多くの者が「私の苦痛に対してひどく同情を示し、涙を流すありさま」«mostravan que avian gran pesar de mia door e fillavan-s' a chorar» だったとカンティーガは語っている。上段の文字は「どのように医師たちが暖めた布を王にかけようとしたが、王はそれを欲しなかったか」«cómo os fisicos lli querian põer panos caentes e el non quis» とある。

図１　フィレンツェ写本F第119葉裏（*Edición facsímil del códice de Florencia,* 1991）

第3場面には頭頂を剃った聖職者が王に書物をさしだすさまが描かれている。留め金のついた赤い表紙の書物である。王は安堵のおももちで手をあわせている。上段の文字は「どのように王はみずから作った聖マリアのカンティーガの本を持ってくるように命じたか」«cómo el rei mandou que lli trouxessem o libro das cantigas que el fez Santa Maria» とある。

第4場面には王が臥したまま書物を開く姿が描かれている。従者たちが王の間近にかがみこむ。やすらぎに満ちた王の表情は、カンティーガの30行目に「すぐに心が穏やかになった」«e logo jouv' en paz» とあるとおりだろう。上段の文字は「どのように［王は］聖マリアの書物を開き、苦痛のうちにそれを自分のもとに置いたか」«cómo abriron o libro de Santa Maria e llo poseron sobelo door» とある。

第5場面には王が上体を起こして書物に口づけする姿が描かれている。従者はみな立ちあがって驚きの表情を示す。上段の文字は「どのように王はすぐに元気になり、なんら苦痛を感じず、聖マリアを讃えたか」«cómo el rei foi logo são e non sintiu ningun door e loou Santa Maria» とある。

第6場面には王が天をあおいで感謝をささげる姿が描かれている。周囲の人々は床にひざまづき、あるいは天を見上げて手をあわせた。上段の文字は「どのように王と、そこにいたほかの誰もが大いに聖マリアを讃え、額を床につけ［礼拝し］たか」«cómo el rei e todolos outros que i estavan loaron muito Santa Maria poend' en terra sas fazes» とある。

全場面がひとしく王の病床を舞台としていた。王は臥していても王冠をつけ、寝台にカスティーリャ・レオン王国の紋章があしらってある。ビトリアの宮廷の一室であろう。舞台設定はまったく同一でありながら、物語の進行とともにその場をとりまく空気が変わっていく。はじめは陰鬱な室内だった。やがておだやかな時間が流れはじめ、最後は歓喜につつまれていく。「恵みはいつも愛する母なる処女を通してもたらされる」«per ssa Madre Virgen, a que sempr' amei» と語られた奇跡がここに現出したのである。

4．アルフォンソ王の肉声

このカンティーガ209番はアルフォンソ王がみずからつづったとされる。ここであらためてふりかえれば、『讃歌集』は誰が書いたのかという疑問が未解決のまま残されていた。かつてはカンティーガの多くが王の自作と考えられていたが、徐々にその見方は修正されつつある。『讃歌集』以外の編纂物については、王が関与したのは最初の企画段階と最後の仕上げの段階に限定して理解されている[(10)]。

『讃歌集』については、アイラス・ヌーネス Airas Nunes の名が注目を集めてきた。写本Eに追記された人物で、ガリシア出身の聖職者とされる。晩年のアルフォンソ王に近侍し、後継のサンチョ4世の宮廷にも仕えた。おそらく彼が多くのカンティーガを作り、さらにアルフォンソ王の宮廷で幾人かのトロバドールとともに『讃歌集』の編纂に関与したのだろう[(11)]。今では王自身の実質的なかかわりが想定されるのはわずか8篇にしぼられている。それもどこまでが王の言葉を伝えるものか確証できない[(12)]。

問題の8篇のうち讃歌が4篇ある。180番と200番と300番と360番はいずれも特定の主題をもたず、たとえば180番は末尾の2行（69〜70行目）に一人称の詩句があるにすぎない。そこには「それだから私は彼女［マリア］に私自身とレオンとカスティーリャ［の王国］を悪しきものから守ってくださ

るように祈る」«Poren lle rogo que quer' amparar a mi de mal, e Leon e Castela» とだけある[13]。讃歌を除く4篇は169番と209番と279番と401番である。先ほど読んだ209番は詩法も語彙も練達のトロバドールのそれと異ならず、彼らの手が加わっていることも考えられる。169番も401番も同様である。その点で279番のみはやや特異な存在ではないか。以下にテクストと試訳を示したい[14]。

［題辞］

1　Como el Rei pidiu mercee a Santa Maria que o guarecesse dũa
2　grand' enf[er]midade que avia ; e ela, como Sennor poderosa,
3　guarecé-o.
　どのように王が患っていた大病から癒やしてくださる恵みを
　聖マリアに願い、力ある貴婦人［であるマリア］が
　王を癒やされたか。

［反復句］

4	*Santa Maria, valed', ai Sennor,*	聖マリア、お救いください。ああ、わが貴婦人。
5	*e acorred' a vosso trobador,*	あなたのトロバドールを助けてください。
6	*que mal le vai.*	彼は病んでいるのだから。

［第1詩節］

7	A tan gran mal e a tan gran door,	それほどの重い病とひどい痛みに、
8	*Santa Maria, valed', ai Sennor,*	聖マリア、お救いください。ああ、わが貴婦人。
9	como soffr' este vosso loador ;	あなたをたたえるこの者が苦しんでおり、
10	*Santa Maria, valed', ai Sennor,*	聖マリア、お救いください。ああ、わが貴婦人。
11	e sã' é ja, se vos en prazer for,	おぼしめしで今すぐ癒やされるなら、
12	do que diz «ai».	彼は口にするだろう。「ああ」
13	*Santa Maria, valed', ai Sennor…*	聖マリア、お救いください。ああ、わが貴婦人。

［第2詩節］

14	Pois vos Deus fez d' outra cousa mellor	神はあなたに何よりのことをなされ、
15	e vos deu por nossa rezõador,	私たちを神に取りなす方としてあたえ、
16	seede-mi ora bõ' ajudador	今はこの試練のなかで助けてくださる方として
17	en est' enssay	私に臨まれた。
18	*Santa Maria, valed', ai Sennor…*	聖マリア、お救いください。ああ、わが貴婦人。

［第3詩節］

19	Que me faz a mort', ond' ei gran pavor,	それは私が死に至るのではと恐れさせるほど
20	e o mal que me ten tod' en redor,	その病は体のあらゆるところにおよび、
21	que me fez mais verde mia coor	一層の青白い色にした。それはまるで
22	que dun canbrai.	カンブレ［の布］のように。
23	*Santa Maria, valed', ai Sennor…*	聖マリア、お救いください。ああ、わが貴婦人。

［第４詩節］

24	Que fez enton a galardõador	そのときあらゆる恵みをさずける方、
25	de todo ben e do mal sãador ?	病を癒やす方は何をされたか。
26	Tolleu-ll' a fever e aquel umor	マリアは熱を抑え、有害な濁った体液を
27	mao e lai.	排除されたのである。
28	*Santa Maria, valed', ai Sennor...*	聖マリア、お救いください。ああ、わが貴婦人。

王は聖母のトロバドールすなわち詩人をもってみずからを任じている。これは『讃歌集』の序詩「聖マリアのトロバドールとして」に通じあう。そのうえで王は「あなたのトロバドールを助けてください」«acorred' a vosso trobador» と懇願する。「あなたをたたえるこの者」«este vosso loador» が苦しんでいるのだと聖母にあわれみを乞うている。聖母を神に「とりなす方」«rezõador» つまり仲介者と頼み、また「助けてくださる方」«ajudador» つまり救助者として期待する。さらに「あらゆる恵みをさずける方」«galardõador de todo ben» と呼び、「病を癒やす方」«do mal sãador» とも呼んでいる。たたみかけるように聖母の別称を連呼していく手法は、教会典礼で唱える連願 litania を思わせる。

22行目の「カンブレ」«canbrai» は北フランスの町カンブレ Cambrai のことで、上質のリネンの産地として知られた。蒼白になった王の表情を透き通るまでの布の青白さにたとえたのである[15]。王の病の深刻さを語っている。そうしたなかで詩行ごとにくりかえされていく「聖マリア、お救いください。ああ、わが貴婦人」«Santa Maria, valed', ai Sennor» というひびきは、ひたむきなまでに直截であり、技巧にあふれたどんなカンティーガよりも力強い。たとえ王の自作がこれ１篇だったとしても『讃歌集』に加えられたことは何より貴重だと思う。

カンティーガ279番はエル・エスコリアル写本Eとトレド写本Toに掲載されている。写本Eでは第251葉表から裏を占めており、251葉の第１列から２列にかけて楽譜が記され、つづいて251葉裏の第１列の冒頭まで詩句が記される。写本Toでは末尾に置かれた聖母の奇跡のカンティーガ15篇の10番目にあたり、第156葉表から裏を占めている。156葉表の第１列から第２列にかけて楽譜が掲載され、つづいて裏の第１列の冒頭まで詩句が記される［図２］。いずれにも挿画は含まれていない。

わずか28行のカンティーガだが、詩法は独特である。４行目から６行目まではエストリビージョすなわち反復句リフレインである。１行10音節で脚韻は -or であり、最後の行のみ４音節で脚韻は -ai である。第２詩節は７行目から11行目まで各行ごとにエストリビージョの最初の１行をはさみ、同じく -or で韻を踏む。12行目のブエルタすなわち折返し句は１行４音節で、脚韻はエストリビージョの最終行と同じ -ai である。つづく第２詩節以下はいずれも各10音節のムダンサすなわち一連の詩行が３行つづいたあと４音節のブエルタがあり、脚韻の構成もすべて同様である。トレド写本に記された曲の流れから判断するならば、第１詩節と同じく第２詩節以下も各行ごとにエストリビージョの最初の１行をはさんで歌われたのではないか。それならば「聖マリア、お救いください……」という詩句のくりかえしが、なおさらに胸にせまるものだったろう。

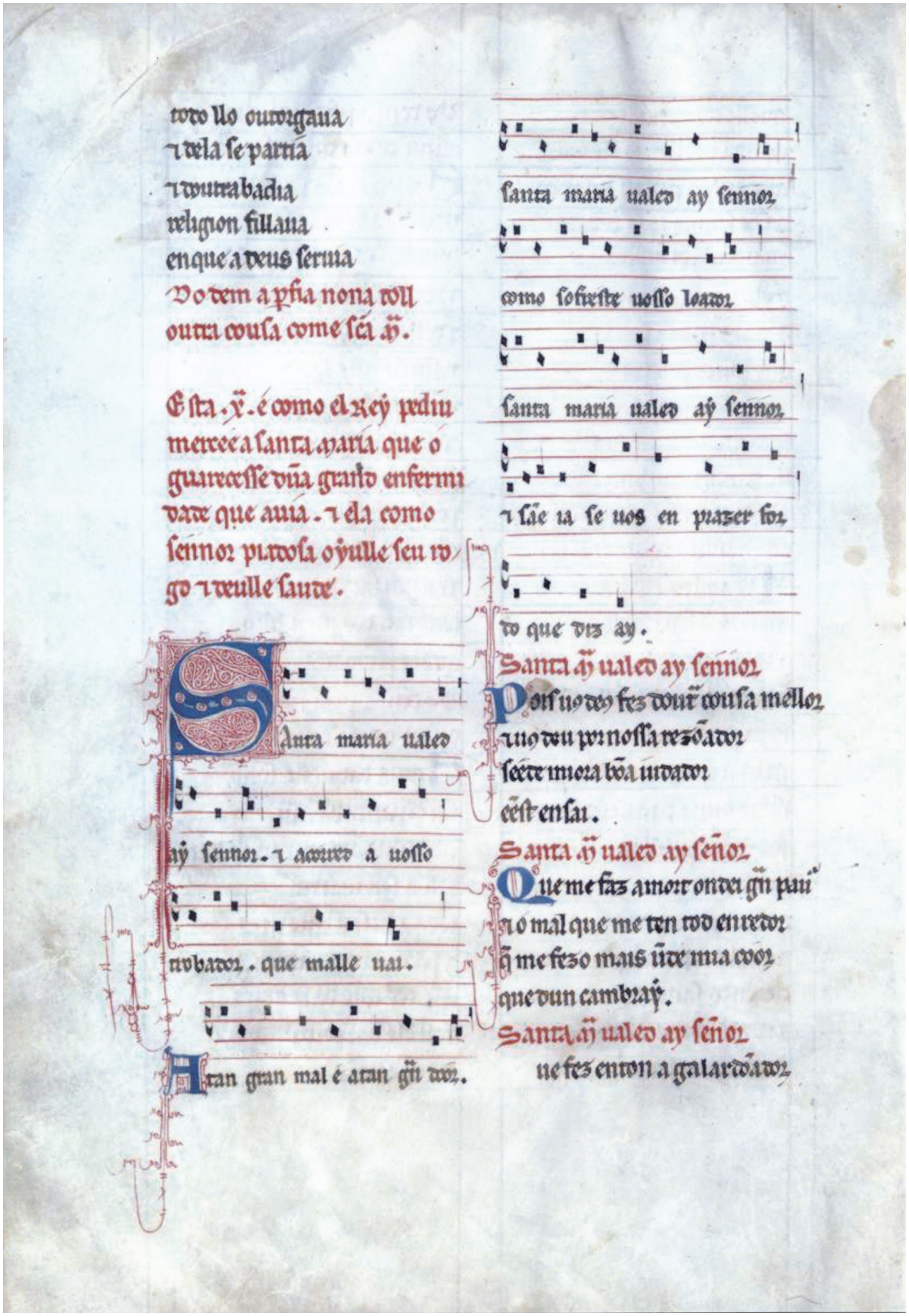

図２　トレド写本To第150葉裏（*Edición facsímile do códice de Toledo,* 2003）

5．癒やしと感謝の日々

アルフォンソ王の後半生は苦悩に満ちていた。カンティーガ235番はそれを朗々と語り伝えていく。テクストと試訳を以下に示したい[16]。

［題辞］

1　［E］sta é como Santa Maria deu saude al Rey Don Affonso

2　quando foi en Valadolide enfermo que foi juygado por morto.

これはどのように聖マリアがドン・アルフォンソ王に救いをもたらしたのか。

それは王がバリャドリードで亡くなるかと思うほどの病にかかったときだった。

［反復句］

3　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val,*

4　*assi quen nono gradece faz falssidad' e gran mal.*

恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように、

感謝しない者はあやまちを犯し、大きな痛手をこうむる。

［第1詩節］

5　E daquest' un gran miragre vos direi desta razon,

6　que avẽo a Don Affonsso, de Castel' e de Leon

7　Rei, e da Andaluzia dos mais reinos que y son ;

8　e, por Deus, parad' y mentes e non cuidedes en al.

9　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

これについて、あなた方にこの事実に関わる大いなる奇跡を語ろう。

カスティーリャとレオンとアンダルシアと、さらにいくつもの

王国の王であるドン・アルフォンソに起きた奇跡である。

どうかそこに心をとどめて聞き、ほかのことにとらわれないように。

恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第2詩節］

10　Aqueste Santa Maria mui de coraçon de pran

11　loava mais d'outra cousa, e non prendia affan

12　en servi-la noit' e dia, rogando seu bon talan

13　que morress' en seu serviço, poi-lo seu ben nunca fal.

14　Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...

王は何にもまして聖マリアを心を込めて讃え、

そして夜も昼も倦むことなく彼女に仕えて、

そのまま命を終えられるようにと慈悲を願った。

彼女のいつくしみには欠けるところがないのだから。

恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第 3 詩節］

15　E desto que lle pedia tan muito a afficou

16　por esto, que hũa noite en sonnos llo outorgou,

17　ond' ele foi muit' alegre, tanto que ss' el espertou,

18　e loou porend' a Virgen, a Sennor espirital.

19　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

そのことを懇願してマリアに心から祈ったところ、

ある夜の夢で彼女はそれを聞き入れてくださった。

そこで王は大いによろこび、めざめるとすぐに

処女［マリア］をそれゆえわが心の貴婦人と讃えた。

　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第 4 詩節］

20　Pois passou per muitas coitas e delas vos contarei :

21　Hũa vez dos ricos-omes que, segundo que eu sei,

22　se juraron contra ele todos que non fosse Rey,

23　seend' os mais seus parentes, que divid' é natural.

24　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

それだから、王がその身にこうむった多くのことについて語ろう。

かつて高位の貴族のある者どもが、私が知ったところでは、

王をその位にふさわしくないとしておとしめたのである。

王とは血のつながった親族であるにもかかわらず。

　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第 5 詩節］

25　E demais, sen tod' aquesto, fazendo-lles muito ben,

26　o que lle pouco graçian e non tĩyan en ren;

27　mais conortou-o a Virgen dizendo：«Non dés poren

28　nulla cousa, ca seu feito destes é mui desleal.

29　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

そのうえに王は彼らを手厚くもてなしていたというのに、

すこしも感謝せず、まるで気にとめてもいなかった。

しかし処女マリアは王を慰めて言った。「何も気に病むことは

ありません。彼らのこのおこないはたいへんな裏切りなのだから。

　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第 6 詩節］

30　Mas eu o desfarei todo o que eles van ordir,

31　que aquelo que desejan nunca o possan conprir ;

32　ca meu Fillo Jhesu-Christo sabor á de se servir,

33　e d'oi mais mui ben te guarda de gran pecado mortal.»

34　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

彼らがたくらもうとしたことをことごとく打ち破りましょう。

彼らの望んでいることが何ひとつ成し遂げられないように。

御子イエス・キリストもよろこんで力になってくれます。

今日からあなたを死に至る大罪から守ってくれるでしょう」

　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第 7 詩節］

35　Tod' aquesto fez a Virgen, ca deles ben o vingou ;

36　e depois, quand' en Requena este Rey mal enfermou,

37　u cuidavan que morresse, daquel mal ben o sãou ;

38　fez por el este miragre que foi começ' e sinal

39　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

処女［マリア］はそのすべて果たし、彼らに十分にその報いを受けさせた。

それからのち、この王はレケナで重病をわずらい、

人々は王が亡くなるのではと思ったとき、病は癒やされ、

王のためにこの奇跡を起こして最初のあかしとされた。

　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第 8 詩節］

40　Dos bẽes que lle fezera e lle queria fazer.

41　E depois, quando da terra sayu e que foi veer

42　o Papa que enton era, foi tan mal adoecer

43　que o teveron por morto dest' anfermidad' atal.

44　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

それは王に授け、さらに授けようとする恩恵のしるしである。

それからのち、王が自分の国を離れて、当時の教皇との

会見におもむいたとき、ひどい病におちいってしまい、

これほどの重症では亡くなるにちがいないと思われた。

　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第 9 詩節］

45　E pois a Monpisler vẽo e tan mal adoeceu

46　que quantos fisicos eran, cada hũu ben creeu

47　que sen duvida mort' era；mas ben o per guareceu

48　a Virgen Santa Maria, como Sennor mui leal.

49　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

それから王はモンペリエに着くと、病はいよいよひどくなり、

何人もの医師が、みなそれぞれに王は亡くなったと信じた。

ところが、まことに信頼できる貴婦人である処女聖マリアは
王の病をたしかに癒やされたのであった。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第10詩節］

50　E feze-ll' en poucos dias que podesse cavalgar
51　e que tornass' a ssa terra por en ela ben sãar ;
52　e passou per Catalonna, en que ouve de fillar
53　jornadas grandes no dia, como quen and' a jornal.
54　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

マリアは王をわずか数日で馬に乗れるようにし、
健康を取りもどして祖国へ戻れるようにした。
王はカタルーニャを経て行った。誰もがその道を
たどって旅するように、日々たいへんな道のりだった。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第11詩節］

55　E pois entrou en Castela, vẽeron todos aly,
56　toda-las gentes da terra, que lle dizían assy :
57　«Sennor, tan bon dia vosco». Mas depois, creed' a my,
58　nunca assi foi vendudo Rey Don Sanch' en Portugal.
59　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

それから王がカスティーリャに入ると、みなが王に会いに来て
国中の人がこぞって「王様、ようこそ戻られました」と挨拶した。
私［の語ること］を信じなさい。それは以前のことだが、
ポルトガルのドン・サンシュ王がかつてない裏切りを受けた。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第12詩節］

60　Ca os mais dos ricos-omes se juraron, per com' eu
61　sei, por deitaren do reyno e que ficasse por seu,
62　que xo entre ssi partissen ; mas de fazer lles foi greu,
63　ca Deus lo alçou na cima e eles baixou no val.
64　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

高位の貴族の大多数が誓約をかわし、私の知るところでは、
彼を王国から追い出し、自分たちの国にしようとたくらみ、
彼らのあいだで分割をはかったが、混乱におちいった。
神は王を頂きに昇らせ、者どもを淵に落とされたのだから。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第13詩節］

65　E depois, quand' en Bitoria morou un an' e un mes,

66　jazendo mui mal doente, contra el o Rey frances

67　se moveu con mui gran gente；mas depois foi mais cortes,

68　ca Deus desfez o seu feito, com' agua desfaz o sal.

69　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

それからのち、王がビトリアで一年とひと月を過ごしたとき、
重い病に伏せっているあいだ、フランスの王が彼に敵対し、
大軍をひきいてきたが、やがて帰順を示したのである。
神が彼らのくわだてを、水が塩を溶かすように解消させたから。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第14詩節］

70　E depois de muitos maes o sãou, grandes e greus,

71　que ouve pois en Castela, u quis o Fillo de Deus

72　que fillasse gran vingança daqueles que eran seus

73　ēemigos e pois dele. E ben com' ard' estadal

74　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

それからのち、王がさらにカスティーリャでわずらった
重く痛ましい病を神は癒やされ、そこで神の御子は
王に敵対する者ども、したがって神の敵対者への
厳しい報復を王に許した。あたかも大蠟燭が燃えるように、
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第15詩節］

75　Ardeu a carne daqueles que non querian moller ;

76　os outros pera o demo foron e, sse Deus quiser,

77　assi yrá tod' aquele que atal feito fezer,

78　e do mal que lles en venna, a mi mui pouco m' incal.

79　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

妻を大事にしない者どもの体を焼くことを［許した］。
ほかの者どもは悪魔のもとへ去った。神が望まれるなら、
同じことをする者はみなそうなるがよい。
彼らの身におよぶ災厄は、私にはどうでもよいこと。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第16詩節］

80　E pois sayr de Castela, el Rey con mui gran sabor

81　ouve d'ir aa fronteira；mas a mui bõa Sennor

82　non quis que enton y fosse, se non sãasse mellor ;

83　porend' en todo o corpo lle deu febre gẽeral.

84　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

それから王はカスティーリャを離れることを強く望み、
国境に向かったが、よき主［であるマリア］はそのとき
王が全快しないうちは、そこへ行くことをよしとせず、
そのため体中にあまねくおよぶ熱を出させた。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第17詩節］

85　E con est' anfermidade das outras sãar-o fez ;

86　e u cuidavan que morto era, foi-sse dessa vez

87　dereit' a Valedolide, u a Sennor mui de prez

88　o guariu do que ficara. Mas ante quis que en tal

89　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

この病によってほかの病を癒やそうとされたのである。
人々が王は亡くなると思ったとき、王はこのときは
まっすぐにバリャドリードへ向かい、そこで気高い貴婦人は
残る病を癒やされた。だがそのようになさるに先立って、
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第18詩節］

90　Ponto vẽess' a seu feito, que non ouvess' y joyz

91　que de vida o julgasse, e a Sant' Anperadriz

92　lle fez ben sentir a morte；mais eno dia fiiz

93　de Pasqua quis que vivesse, u fazen ciro pasqual.

94　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

王が生きているとは誰も断言できないほどの耐えがたさに
至らせたのである。そして聖なる王妃［マリア］は
王に死を予感させた。だが復活祭のよろこばしき日に
人々が復活祭の蠟燭をこしらえるとき、王に命をあたえ、
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第19詩節］

95　E ar foy-o conortando, ca maltreit' era assaz,

96　e de todas sas doores o livrou ben e en paz,

97　tragendo per el sas mãos, e non tiinna enfaz

98　e parecia mas crara que é rubi nen crestal.

99　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

さらに王を慰めた。王はひどく苦しめられていたから。
そして両手を王にさしのべ、まったき安らぎのなかで、

あらゆる苦痛から王を解放した。マリアはヴェールを
まとわずに、水晶やルビーのように光輝いて見えた。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第20詩節］

100　E tod' aquesto foi feito dia de Pascua a luz
101　per ela e per seu Fillo, aquel que seve na cruz
102　que tragia nos seus braços, que pera nos sempr' aduz
103　a ssa merce' e ssa graça no perigo temporal.
104　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

このことはすべて輝かしい復活祭の日におこなわれた。
マリアと、そして十字架にかけられその両腕で抱きしめた
御子によってなされた。どんな危ないときも私たちのために
いつでも慈悲と恩恵をほどこされる御子によって。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

［第21詩節］

105　Tod' aquesto faz a Virgen, de certo creed' a mi[n],
106　pera dar-nos bõa vida aqui, e pois bõa fin ;
107　e porende a loemos que nos meta no jardin
108　de seu Fill' e que nos guarde do mui gran fog' yfernal.
109　*Como gradecer ben-feito é cousa que muito val...*

処女［マリア］が成されることのすべてを、たしかなことと信じなさい。
よい人生と、そしてよい終わりを私たちにあたえてくださるのだと。
それだからマリアを讃えよう。その御子の庭に私たちを迎えてくださり、
地獄の業火から私たちを守ってくださるように。
　恩恵に感謝するのがとても大事なことであるように……

百行を越える長大なカンティーガである。王の生涯におけるさまざまな出来事を織り込みつつ、あたかも叙事詩のように語り連ねていく。1245年にさかのぼる回想を別として、王の行動に直接かかわることは1271年から78年におよび、語られた地域もカスティーリャ・レオン王国からアラゴン、カタルーニャ、さらに南フランスからポルトガルにまたがっている。主題のひとつは王の身近にいた者たちのあいつぐ反逆行為であり、それに対する王の報復である。史実と対応する記事も少なからずあって、このカンティーガを歴史資料として貴重なものとしている[17]。加えて王の失意と闘病の日々が回顧され、聖母の癒やしと感謝の思いが切々とつづられている。

冒頭に３つの詩節をついやして王の変わることのない聖母への思いが表明され、つづく20行目の詩節から事件があいついで語られる。「かつて高位の貴族のある者どもが、私が知ったところでは、王をその地位にふさわしくないとしておとしめた」«Hũa vez dos ricos-omes que, segundo que eu sei, se juraron contra ele todos que non fosse Rey» とある。

アルフォンソ王がアル・アンダルスとムルシアを領有したのち、その地に残留したイスラーム教徒の反乱が頻発したことは前に述べた。その平定には時間を要したが、1260年代の終わりにはようやく沈静に向かう。しかしそのおりの過大な負担が一部の貴族にとって不満の種となった。1271年に王の弟のフェリペ Felipe 王子をかつぎあげて謀反を画策する。その知らせが王のもとに届いたのは翌年、ムルシア滞在中のこととされる[18]。年内にブルゴスでコルテス cortes と呼ばれる身分制議会が開かれ、その直後に王の宗主権を否定する者たちが同盟した。カンティーガはこの暴挙について語っている。

ここで「高位の貴族」«ricos-omes» と訳した言葉は中世のイベリアでは上級貴族を意味した。一般には特権を享受する高位の家柄と説明されている[19]。13世紀初頭までに成立した『エル・シードの歌』にもその意味で登場する[20]。その下に古い家系を誇る中級貴族 īnfançon がいる。これはのちにポルトガルではフィダルゴ fidalgo、スペインではイダルゴ hidalgo と呼ばれた。ドン・キホーテはこの階級である。

ここでは23行目に「王とは血のつながった親族であるにもかかわらず」«seend' os mais seus parentes, que divid' é natural» とあり、カンティーガ234番にも「王から出た貴族」«ricom' era del Rey» とあるから、この者たちが血縁関係にあることを示している[21]。つづく35行目に聖母が「彼らにその報いを受けさせた」«ca deles ben o vingou» とある。しかし結果は彼ら上級貴族の特権を維持させるほかなかった[22]。

つづく36行目に王がレケナ Requena で重病をわずらったとある。レケナはバレンシア地方の都市で、1273年７月にその北西の町クエンカ Cuenca に王が滞在したことが資料から確証できる。義父のアラゴン王ジャウマ１世と会見するためだった。レケナにおもむいたのはその直後のこととされる[23]。「人々は王が亡くなるのではと思ったとき、病は癒やされ」«u cuidavan que morresse, daquel mal ben o sãou» とある。これは高熱を発したためで、前述のブルゴスで馬に蹴られたときの後遺症と考えられている[24]。このカンティーガのなかで聖母が起こした最初の奇跡であった。義父との会見は次の展開につながっていく。

翌1274年にアルフォンソ王はフランスに向けて旅立った。41行目に「王が自分の国を離れて、当時の教皇との会見におもむいたとき」«quando da terra sayu e que foi veer o Papa que enton era» とある。これはローマ教皇にすがって神聖ローマ帝国の皇位を得るためだった。あけて１月にバルセロナに到着してジャウマ１世に再会した。前回の義父との会見もその下準備である。当時アラゴン王国はバルセロナ伯領のカタルーニャと連合王国を築いていた。王は地中海沿いに北上してフランス領に入り、ナルボンヌ Narbonne からモンペリエ Montpellier をへて、５月初旬にローヌ河岸の町ボーケール Beaucaire に到着した[25]。

アルフォンソ王はボーケールで教皇グレゴリウス Gregorius 10世に謁見した。神聖ローマ皇帝の大空位時代がつづくなか、王は母ベアトリスの血筋を頼みとして皇帝に選出されている。1257年のことだった。ところがこのとき二重選挙がおこなわれてコーンウォール伯も同時に選出された。伯の没後にハプスブルク家のルドルフ１世が神聖ローマ皇帝に即位すると、教皇庁がこれを支持した。グレゴリウス教皇はアルフォンソ王との会見を許したものの、帝位を認める気など微塵もない。長年にわたる王の野望はまったく挫折したのである。これにはよほどこたえたのだろう。王は「ひどい病にお

ちいってしまい、これほどの重症では亡くなるにちがいないと思われた」«foi tan mal adoecer que o teveron por morto dest' anfermidad' atal» とある。ローヌ河岸の町に3か月あまり滞在したのち、失意のうちに帰途に立った。8月5日に地中海岸にほど近いモンペリエの町にたどり着いている[26]。

45行目以下に「それから王はモンペリエに着くと、病はいよいよひどくなり、何人もの医者が、みなそれぞれに王は亡くなったと信じた」«E pois a Monpisler vẽo e tan mal adoeceu que quantos fisicos eran, cada hũu ben creeu» とある。モンペリエには当時のヨーロッパで最高水準の医療機関が置かれていた。12世紀の末に教皇庁の要請でローマに救護会を創立したギイ・ド・モンペリエ Guy de Montpellier は、故郷の町に病院を建設する。この町の大学には中世から知られた医学部もあり、ギイはここで心と体をトータルに癒やす医療の実践をこころみた。今でいうホリスティック医療にほかならない。これは新しい言葉だが、中世にはイスラーム医学にもとづく考え方だった。アラビア語からカスティーリャ語に翻訳され、ラテン語に重訳された医学の思想と技術が、イベリアから南フランスにもたらされたのである[27]。

しかしその最先端医療も王がこうむった心の傷には功を奏さなかった。「ところが、まことに信頼できる貴婦人である処女聖マリアは王の病をたしかに癒やされた」«mas ben o per guareceu a Virgen Santa Maria, como Sennor mui leal» という。王の健康は回復して馬にも乗れるようになり、ひたすら祖国への道を急いだ。カスティーリャのアルカラ・デ・エナレス Alcalá de Henares に帰還したのは、その年1275年も暮れようとするころだった。

ここでカンティーガは話題を転じて、過去の出来事を回顧している。かつてポルトガル王サンシュ2世が退位に追い込まれたことがある。60行目以下に「高位の貴族の大多数が誓約をかわし、私の知るところでは、彼を王国から追い出し、自分たちの国にしようとたくらみ、彼らのあいだで分割をはかった」«Ca os mais dos ricos-omes se juraron, per com' eu sei, por deitaren do reyno e que ficasse por seu, que xo entre ssi partissen» とある。サンシュ王は貴族の教会への寄進を禁じたために、時の教皇インノケンティウス4世からも廃位を宣告されている。1245年のことだから30年も前の話だが、なぜ今になってこの事件を持ち出したのだろう。

アルフォンソ王がカスティーリャに帰還してまもなく後継問題が持ち上がった。嗣子であるフェルナンド・デ・ラ・セルダ Fernando de la Cerda が早世したのだ。王子の突然の死は病身の王に追い打ちをかける打撃をあたえた。相続権のある王子の長子はわずか5歳である。またもや上級貴族の一団が古都トレドで誓約をかわし、フェルナンドの弟のサンチョ Sancho を王位継承者としてかつぎ出そうと策動をはじめた[28]。このことがポルトガルの過去の椿事を想起させた理由ではないか。

王はビトリアに移り、病の床に伏せるばかりだった。これはすでに読んだカンティーガ209番に語られており、『讃歌集』の手稿本を手もとに置いて病が癒えたのはこのときである。そのあいだにも「フランスの王が彼に敵対し、大軍をひきいてきた」«contra el o Rey frances se moveu con mui gran gente» と66行目にある。フィリップ Philippe 3世が指揮するフランス軍はナバラ王国の都パンプローナ Pamplona に迫った。ナバラはアラゴン王国に隣接する小国である。フィリップ王はナバラの領有をもくろみ、アルフォンソ王のもとへは使者を送ってきた。1276年のことである。この年に義父のジャウマ1世が没した。

王の病が癒えたのち、「神の御子は王に敵対する者ども、したがって神の敵対者への厳しい報復を

王に許した」«o Fillo de Deus que fillasse gran vingança daqueles que eran seus ẽemigos e pois dele» とある。1277年にカスティーリャの上級貴族シモン・ルイス・デ・ロス・カメロス Simón Ruiz de los Cameros が焚刑に処された。王の報復は「あたかも大蠟燭が燃えるように」«E ben com' ard' estadal»「妻を大事にしない者どもの体を焼くことを［許した］」«Ardeu a carne daqueles que non querian moller» とある。この男はアルフォンソ王の弟ファドリーケ Fadrique の庶子ベアトリス Beatriz を妻としていた。「大蠟燭」«estadal» は『讃歌集』にしばしば登場し、写本の挿画にも描かれている。エル・エスコリアル写本T（T.I.1）のカンティーガ８番の挿画第６場面に見えるのは、燭台も含めて身の丈ほどもある巨大な蠟燭である[29]。同じ年にファドリーケも王の命令で絞首刑に処された。両名は性的関係にあったと推測されている[30]。

王の病はまたぶり返すが、これは聖母のはからいだという。高熱を発したのは聖母が「この病によってほかの病を癒やそうとされた」«E con est' anfermidade das outras sãar-o fez» ためだった。聖母は王をバリャドリード Valladolid に向かわせる。移動宮廷の時代であるから、王の居所がそのまま宮廷の所在地だった。17世紀にマドリードが首都に確定するまで、バリャドリードは代々のスペイン王室にとって首都ともいえる場所だった。王は1278年の４月５日までにここに至った[31]。

その地で聖母は「王に死を予感させた」«lle fez ben sentir a morte» ほどの試練をあたえる。そのうえで復活祭の日に王の病を癒やした。この年の復活祭は４月17日である[32]。聖母は「王に命をあたえ」«quis que vivesse»「さらに王を慰めた」«E ar foy-o conortando» という。そしてついに「まったき安らぎのなかで、あらゆる苦痛から王を解放した」«e de todas sas doores o livrou ben e en paz» のである。最後にあらためて聖母を讃え、聖母を信じることの尊さを語って、この長大なカンティーガを閉じている。

カンティーガ235番はいつ作られたのか。最後に語られたバリャドリードの奇跡の年1278年以降、サンチョがバリャドリードでコルテスを主催した1282年以前と考えられている[33]。そのときの招集者はアルフォンソ王ではない。つまり事実上のクーデターである。貴族や聖職者の多くが同調した。これ以後アルフォンソ王は権限をうしない、王位はもはや肩書きのみとなった。身内の者までが次々と離反していく。最後まで老残の王を見捨てずにいたのはムルシアとセビーリャのふたつの都市だけだった。若い日の王が苦心の末に繁栄をもたらした場所である。セビーリャに移った翌々年、1284年４月４日に王は逝去した。遺体は遺言によってセビーリャ大聖堂に葬られた。

６．うしなわれた挿画の復原

カンティーガ235番はエル・エスコリアル写本Ｅとフィレンツェ写本Ｆに掲載されている。写本Ｅでは第212葉裏から214葉表を占めており、212葉裏の第２列末尾から213葉の第１列まで楽譜が記され、つづいて214葉表の第２列まで詩句が記される。挿画は掲載されていない。写本Ｆでは235番の本文を欠くものの、挿画のみが第92葉表に掲載されている。『讃歌集』の通例として末尾５番台は長編のカンティーガが掲載され、挿画も２葉12場面にわたる。したがって235番も本来は挿画がもう一葉あったにちがいない[34]。後述するとおり現存挿画はカンティーガの後半部に対応するので、うしなわれたのは前半部の挿画と考えられる。

なぜこうした欠損が生じたのか。フィレンツェ写本の由来については本稿第１章で述べたが、ここ

でふりかえってみたい。

200篇のカンティーガを収めるエル・エスコリアル写本Tが完成したのち、さらに200篇を追加して400篇の集成とする作業がはじまった。アルフォンソ王直属の工房では、写本Tとまったく同じ体裁ですべてのカンティーガに楽譜と挿画を添えた豪華本の制作が進められる。しかしアルフォンソ王の死によって作業は停滞し、最終的には中途で放棄された。挿画のうち完成したのは48葉分で、残りはすべて未完成である。楽譜も譜線が引かれただけで音符はまったく記されていない。王の最晩年にはこの豪華な写本の完成がおぼつかないものと懸念されたらしく、より簡略な体裁の写本が別途に制作された。これが現存するエル・エスコリアル写本Eであり、420篇のカンティーガと楽譜が掲載された。未完成に終わった豪華本は王の遺体とともにセビーリャ大聖堂に納められた。その後は流転をかさねた末にフィレンツェ国立中央図書館の蔵書となる。そのあいだに散逸した部分も少なくなかった。現在は131葉を存するが、もとは166葉あったと推定されている[35]。

フィレンツェ写本Fに伝えられた235番の挿画も一部は未完成であり、各場面の上段も枠だけは用意されているが文字は記されていない。うしなわれた挿画の前半部分も通例どおり6場面あったとすれば、現存する挿画の1段目左側は本来は第7場面ということになろう。これまでの研究によって1葉目にあったにちがいない挿画の復原案が提出されている[36]。フランシスコ・コルティ Francisco Corti による図をここに示したい［図3］。それをもとに本来の第1場面から第6場面に何が描かれていたかを考え、つづいて第7場面以下の現存する挿画の内容をたどっていく。

うしなわれた第1場面には寝台に臥す王の姿が描かれていたと推定される。カンティーガの15行目以下に、王が夜も昼も聖母につかえて一生を終わりたいと懇願したところ、「ある夜の夢で彼女はそれを聞き入れてくださった」«que hũa noite en sonnos llo outorgou» と16行目にある。おそらく王のかたわらには聖母とそれにしたがう天使がいたであろう。

第2場面には聖母の祭壇の前にひざまづく王の姿が描かれていたにちがいない。17行目に「めざめるとすぐに処女［マリア］をそれゆえわが心の貴婦人と讃えた」«tanto que ss' el espertou, e loou porend' a Virgen, a Sennor espirital» とある。

第3場面には王の前にあらわれた聖母の姿が描かれていたと推定される。21行目以下に貴族たちが王をおとしめようと画策した次第が語られている。聖母は王を慰めて言った。「何も気に病むことはありません。彼らのこのおこないはたいへんな裏切りなのだから」«Non dés poren nulla cousa, ca seu feito destes é mui desleal» と。復原図の聖母は王にそう語っているのだろう。王はとなりの場面を見つめている。これは『讃歌集』の挿画にしばしば見られる表現法で、つづく場面への視線の移動うながすものである。

第4場面には聖母が天使をしたがえて岩の上に立ち、武装した騎馬集団に向きあう姿が描かれていたと推定される。王に反逆する者たちであろう。聖母は彼らのたくらみをことごとく打ち破り、「彼らに十分にその報いを受けさせた」«ca deles ben o vingou» と35行目にある。

第5場面には病床にある王の姿が描かれていたと推定される。つづく36行目以下にレケナで王が重病におちいったことが語られ、誰もが王が亡くなるのではと思ったが病は癒えたという。このカンティーガにおいて最初に語られた聖母の奇跡にちなむものである。

第6場面は高位の人物に対座する王の姿が描かれていたと推定される。ひときわ高い玉座に坐し、

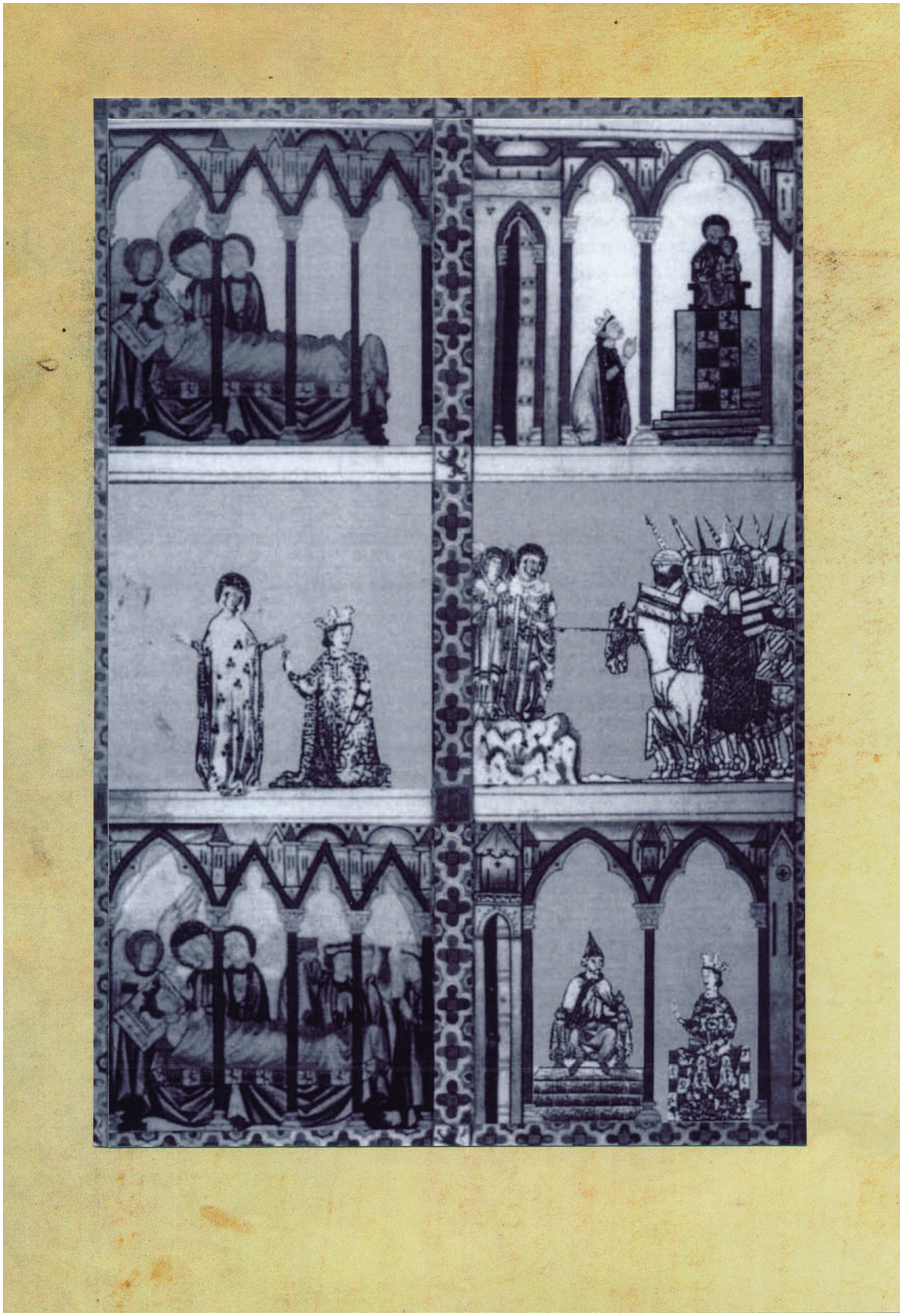

図３　カンティーガ235番挿画復原案（*Francisco Corti, “Retórica visual” op. cit.,* 2002）

三重冠をかぶっているのはローマ教皇にほかならない。アルフォンソ10世が神聖ローマ帝国の皇位を望み、南フランスのボーケールまでおもむいて教皇グレゴリウス10世に謁見した。このことが41行目以下に語られている。だがそれは実現されることなく、王は病を得てようよう帰国の途につくほかなかった。

以上がうしなわれた挿画の復原案である。235番の内容に沿って研究者が想定したもので、これによって現存する挿画との連続性が明確になった。つづいて写本Fの第92葉表に掲載された第７場面以下の挿画をたどってみたい［図４］。これまでと同じように１段目の向かって左を第７場面とし、３段目の右の第12場面へ進んでいく。前述のとおり各場面の上段には枠が置かれているが、内容を説明する文字は未記入のまま残された[37]。

第７場面には病床の王の姿が描かれている。舞台はすでに見たカンティーガ209番の挿画と同様である。王の足もとには顔を覆って嘆き悲しむ人、瓶を手にして語る人の姿がある。後者は209番で暖めた布をさしだす医師と同じ帽子をかぶっている。枕もとには聖母が天使をしたがえ、眠っている王の胸に手をあてる。王はボーケールから帰る途中、モンペリエで病が昂じた。「ところが、まことに信頼できる貴婦人である処女聖マリアは王の病をたしかに癒やされた」«mas ben o per guareceu a Virgen Santa Maria, como Sennor mui leal» と47行目にある。

第８場面には馬上の王を人々が出迎えるようすが描かれている。55行目以下に王がカスティーリャに帰還すると国中の人がこぞって挨拶に訪れたとある。王は深いつばの帽子 sombrero をかぶり、出迎えの代表者から手に接吻を受けた。王にしたがう騎馬兵はカスティーリャ・レオン王国の紋章をあしらった鉄兜 casquete をかぶり、出迎えの先頭に立つ人々は騎士 caballero の階級が常用するつばのある兜 capiello をかぶっている[38]。

第９場面は未完成のまま放棄された。室内を舞台とする際の定型というべきアーチがならぶのみで、人物も大道具もまったく描かれていない。コルティは第７場面と同じく病床の王が描かれるはずだったと推定する[39]。さらに王のもとにカンティーガの本が置かれるべきだと主張するが、これは疑問である。順序からすれば舞台はビトリアにちがいなく、本のことは209番に語られていた。しかし235番はそのことに言及していない。

第10場面には町の広場で執行された焚刑のようすが描かれている。炎に包まれた人物の頭部がかろうじて識別できる。左右に居ならぶ人々、背景に町並みが見える。72行目に記された「王に敵対する者ども、したがって神の敵対者への厳しい報復」«gran vingança daqueles que eran seus ẽemigos e pois dele» がなされたのである。

第11場面には病床の王のもとにあらわれた聖母と御子の姿が描かれている。カンティーガの語るところでは、王はバリャドリードに移ってから高熱を発した。あらゆる病をこれで癒やそうという聖母のはからいによる。耐えがたいまでの苦しみののち、復活祭の日に王は長年の病から完全に解放された。それは「マリアと、そして十字架にかけられその両腕で抱きしめた御子によってなされた」«per ela e per seu Fillo, aquel que seve na cruz que tragia nos seus braços» と101行目にある。ここに語られた「御子」は磔刑のキリストのことであり、「両腕で抱きしめた」その姿はピエタの形象を思わせる。ところがこの挿画では「御子」は幼な子イエスの姿で描かれている。イエスは身を乗り出して王の手を握りしめた。王は歓喜のあまり恍惚となり、足もとに寄り添う人々は涙にくれている。

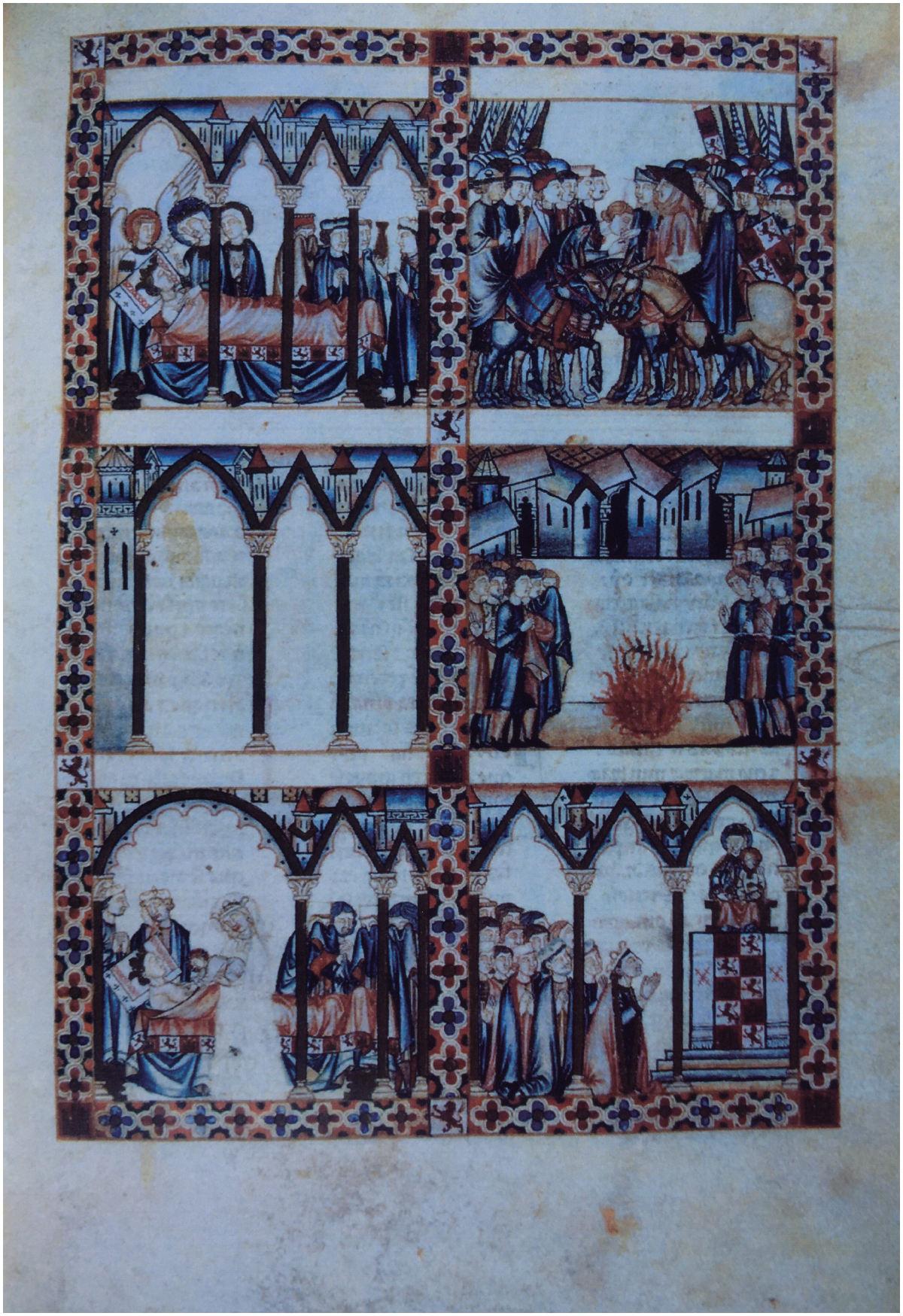

図４　フィレンツェ写本F第93葉表（*Edición facsímil del códice de Florencia,* 1991）

ここでひとつ注目したいのは、聖母の輪郭は描かれていても彩色がされていないことである。つまり白描のまま残されたのである。寝台に臥した王もそれを取り巻く人々も、そして幼な子イエスも彩色が終了している。ところが聖母だけは未完成である。これについてはゴンサロ・メネンデス・ピダール Gonzalo Menéndez Pidal の考察がある。写本Fの場合は中途で放棄された挿画が少なくない。未完成の度合いはさまざまだから、そこから挿画の制作順序が類推できるという。最初に全体の外枠が描かれ、ついで場面ごとの下図が作られる。背景の建物や風景が描かれたのち、人物像の衣服が彩色される。顔と手は空白のまま残され、最後に写本工房のマエストロが仕上げをおこなうという[40]。したがってこの第11場面では、最重要箇所である聖母像の仕上げにいたる直前で制作が放棄されたと考えることができる。

第12場面には聖母の祭壇の前にひざまづく王の姿が描かれている。カンティーガの終わりに王は人々に告げた。「処女［マリア］が成されることのすべてを、たしかなことと信じなさい」«Tod' aquesto faz a Virgen, de certo creed' a mi[n]» と。聖母はかならずや「よい人生と、そしてよい終わりを」«bõa vida aqui, e pois bõa fin» 私たちにあたえてくださる。そう信じてつねに聖母を讃えよという。235番の挿画の最後の場面で、王は聖母の前に進み出て感謝の祈りをささげ、多くの人々がそれにしたがっている。

13世紀のイベリアに生きたアルフォンソ王がいだく聖母の信仰とは、はたしてどのようなものであったか。本稿最終の第５章であらためてこのことを考えてみたい。

注

（１）Manuel González Jiménez y María Antonia Carmona Ruiz, *Documentación e itinerario de Alfonso X el Sabio,* Universitad de Sevilla, 2012, p.61, n.214.

（２）Francisco Corti, “Retórica visual en episodos biográficos reales ilustrados en las Cantigas de Santa María”, *Historia, Instituciones, Documentos*, XXIX, Sevilla, 2002, p.84.

（３）cantiga 367 : ms.F ［laguna］; ms.E.367, fol.329ro-vo ; El maruqués de Valmar（ed.）, *Cantigas de Santa María de Don Alfonso el Sabio*, II, Real Academia Española, Madrid, 1889, pp.511sq.; Walter Mettmann（ed.）, *Afonso X, o Sábio, Cantigas de Santa Maria*, III, Acta universitatis Conimbrigensis, Universidade de Coimbra, 1964, pp.287-289 ; id., *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María*, III, Editorial Castalia, Madrid, 1989, pp.244-246.

（４）Alcuinus, *Officia per ferias*, Feria VI, “Item sabbato in honore omnium sanctorum, Psalmus in honore sanctae Mariae”, *Patrologia latina*, CI, apud Migne Editorem, Paris, 1851, col.586sq.,

（５）cantiga 209 : ms.F.95, fol.119ro ; ms.E.209, fol.193ro ; ; *Valmar, op. cit.*, II, p.293 ; Mettmann, *op. cit.*, ed. 1961, II, pp.274sq. ; ed. 1988, II, pp.259-261.

（６）González Jiménez y Carmona Ruiz, *op. cit.*, pp.80, 505-511.

（７）Mettmann, *op. cit.*, ed. 1988, II, p.259.

（８）Manuel González Jiménez（ed.）, *Diplomatario andaluz de Alfonso X*, Caja de Huelva y Sevilla, Fundación el Monte, Sevilla, 1991, p.560.

（９）次の写本複製本をもとに記述をおこなう。*El códice de Florencia de las cantigas de Alfonso X el Sabio : ms. B.R.*20 *de la Biblioteca Nazionale Centrale*, con estudios de Agustín Santiago Luque, María Victoria Chico y Ana Domínguez Rodríguez, Madrid, Edilán, 1991, p.238.

（10）Antonio García Solalinde, “Intervención de Alfonso X en la redacción de sus obras”, *Revista de filología española*, II, Madrid, 1915, p.286.

(11) Mettmann, "Airas Nunes, Mitautor der Cantigas de Santa Maria", *Iberoromania*, III, Madrid, 1971, pp.8-10.
(12) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1986, I, pp.19sq.
(13) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1961, II, p.201 ; ed. 1988, II, p.195.
(14) cantiga 279 : ms.To.X, fol.156ro-vo ; ms.F [laguna]; ms.E.279, fol.251ro-vo ; Valmar, *op. cit.*, II, p.391 ; Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, pp.72sq. ; ed. 1989, III, pp.52sq.
(15) Kathleen Kulp-Hill, *Songs of Holy Mary of Alfonso X, the Wise*, Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, CLXXIII, Tempe, 2000, p.338.
(16) cantiga 235 : ms.F [verso laguna], pl. fol.92ro ; ms.E.235, fol.212vo-214ro ; Valmar, *op. cit.*, II, pp.324-327 ; Mettmann, *op. cit.*, ed. 1961, II, pp.335-338 ; ed. 1988, II, pp.312-316.
(17) Antonio Ballesteros Beretta, *Alfonso X el Sabio*, Salvat, Murcia, 1963 ; repr. El Albir, Barcelona, 1984, pp.51sq.
(18) González Jiménez y Carmona Ruiz, *op. cit.*, p.67.
(19) Joaquim Carvalho da Silva, *Dicionário da língua portuguesa medieval*, Editora da Universidade Estadual de Londrina, 2ª ed. 2001, p.241.
(20) Alberto Montaner (ed.), *Cantar de mio Cid*, Real Academia Española, Galaxia Gutenberg, Barcelona, 2011, v.2552, 3546.
(21) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1961, II, p.333 ; ed. 1988, II, p.311, v.17
(22) Félex Pérez *Algar, Alfonso X, el Sabio, biografía*, Studium Generalis, Madrid, 1997, p.253.
(23) González Jiménez y Carmona Ruiz, *op. cit.*, pp.71, 469sq.
(24) Ballesteros Beretta, *op. cit.*, p.677.
(25) González Jiménez y Carmona Ruiz, *op. cit.*, pp.78, 493sq.
(26) *ibid.*, p.494.
(27) 拙著『ユダヤ教 キリスト教 イスラーム――神教の連環を解く』ちくま新書、2013, p.135.
(28) Ballesteros Beretta, *op. cit.*, pp.146sq.
(29) *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María, edición facsímil del Códice T.I.1 de la Biblioteca de San Lorenzo el Real de El Escorial, siglo XIII*, Edilán, Madrid, 1979, p.30.
(30) Joseph O'Gallaghan, *El rey Sabio, el reinado de Alfonso X de Castilla*, Universidad de Sevilla, 1996, p.289 ; Francisco Corti, *op. cit.*, p.89.
(31) González Jiménez y Carmona Ruiz, *op. cit.*, p.535
(32) Richard Kinkade, "Alfonso X, Cantiga 235, and the Events of 1269-1278", *Speculum*, LXVII, Cambridge Mass., 1992, p.320.
(33) *ibid.*, p.321.
(34) García Solalinde, "El códice de Florencia y su relación con los demás manuscritos", *Revista de filología española*, V, Madrid, 1918, p.159.
(35) Nella Aita, "O codice florentino das Cantigas de Affonso, o Sabio", *Revista de lingua portuguesa*, XIII, Río de Janeiro, 1921, pp.188sq.
(36) Francisco Corti, *op. cit.*, p.94.
(37) El códice de Florencia, *op. cit.*, p.185.
(38) Gonzalo Menéndez Pidal, *La España del siglo XIII leída en imágines*, Real Academia de la Historia, Madrid, 1986, p.82.
(39) Francisco Corti, *op. cit.*, p.88.
(40) Gonzalo Menéndez Pidal, "Los manuscritos de las Cantigas : Cómo se elaboró la miniatura alfonsí", *Boletín de la Real Academia de la Historia*, CL, Madrid, 1962, pp.36sq. ; id., *op. cit.*, pp.26sq.

付記

筆者は2020年にサンパウロ（カトリック聖パウロ修道会）から『聖母マリアのカンティーガ — 中世イベリアの信仰と芸術』と題した書籍を刊行した。これは『聖母マリア讃歌集』からいくつかのカンティーガを選んで読み解き、中世イベリアの信仰と芸術の諸相を紹介した一般書である。本稿の記述と重なるところもあるが、本稿は考察対象とした個々の作品について原文を掲載し、文献書誌に関する注記を附して学術論文としてまとめたものである。

Las cantigas de Santa María, IV
Una vida dolorosa del rey

KIKUCHI Noritaka

resumen

El rey Alfonso X de Castilla y León constituye un conjunto de canciones por alabanza a Nuestra Señora, llamado las Cantigas de Santa María. Se trata de una coleción de cuatrocientas veinte composiciones escritas en gallegoportugués, lengua literaria adecuada para este tipo de poesía lírica de trovador medieval. Hay unos códices conservados procedente de la propio escritorio del monarca, anotados en natación mensural, un sistema musical precisa para la época. Además, se aparece rodeado en algunas de las ilusraciones de los manuscritos ricos de las cantigas. Todos estos son legados valiosos de la fe y de las artes ibéricas del siglo XIII. En la corte alfonsí que se reunieron poetas, compositores y intérpretes de distintas culturas contiendo cristianos, muslmanos y judios, formaron parte de la agrupación amante de la ciencia y las varias artes.

Leyendo algunas cantigas escogidas para esto estudio, investigaremos las cinco asuntos siguientes：en el primero capítulo, aclarar un propósito principal de las cantigas, respecto al problema sobre el origen de la lírica europea；en el segundo capítulo, tratarse las canciones que cuentan milagros sucedidos con la intervención de Santa María, haciendo una comparación con las obras coetáneas de la lengua vulgar；en el tercero capítulo, tener como objectivo los versos y las miniaturas del códice en relación con algunos lugares sagrados de la Nuestra Señora y sus romeros de entonces；en el cuarto capítulo, seguir la vida del rey llena de altibajos a través de composiciones autobiográficas；en el quinto capítulo, remontrarse desde el ángulo de la teología católica la fuente del culto popular sobre la Inmaculada Concepción de la Virgen, creído después con entusiasmo en las tierras española y portuguesa.

palabras clave：santa María, cantiga, gallegoportugués, música y artes ibéricas medievales, teología católica

Journal of Human Life Design, No.17, 2021.

原稿受領2021年10月 8 日
査読掲載決定2021年12月10日